

咸錫憲の非暴力平和思想

著者：田哲厚（聖公会大学校 NGO 大学院、円光大宗教問題研究所研究員）

翻訳者：崔多蔚（東北大学文学部）

【目次】

- I. はじめに：なぜ咸錫憲なのか？
- II. 非暴力と平和の理解
- III. 考え行動するシアル
- IV. 非暴力：目的と手段の一致
- V. 多元主義的平和共同体
- VI. おわりに：非暴力的な生(日常生活、畚)

I. はじめに：なぜ咸錫憲なのか？

2018年、韓半島の状況を代弁する言葉は「平和 (peace)」と言える。朝鮮半島では高かった分断の壁がすこし低くなっていき、非核化をめぐって、北米だけでなく、周辺の諸大国まで、多くの対話が行き交って、平和という表現が慣れ近づいてくる。しかし、平和とは何か、そしてどうやって平和を作っているかについては、人それぞれ自己中心的な平和を語り、実践の方法から来る葛藤はいまだ残っている。とくに、韓半島で生きてきた人々は、心と生の中で平和を想像し追求してきた。韓半島と呼ばれる特殊な状況における平和を、実践的な思想と運動で結びつけた人物が咸錫憲（ハム・ソッコン、1901-1989）である。

韓国近代史の歳月のなか、咸錫憲の平和思想は、20世紀を生きた豊富な歴史的経験と哲学、深い宗教思想によって作られた。咸錫憲は韓半島の特殊な環境における平和を、普遍的真理の次元から打ち出した。そして世界が一つになっていくということ、だれよりもさきに見通した社会進化論者であった。韓国近現代史の構造的暴力の中で、解決すべき先行課題と平和を強調し、東洋と西洋を結合して独歩的な韓国思想を作り、抑圧と不義に正面から立ち向かった平和運動家であり、歴史、文学、宗教、社会など、多様な分野の思想家であった。また、咸錫憲は一生を宗教霊性の求道者として送り、一貫して宗教哲学的思惟の姿勢を示した。平和思想のような社会的言説においては、「新しさ」という宗教体験を根幹としている。

平和運動は新しい人格の誕生と人間革命という精神運動から始まったと見ている。

金敬宰は咸錫憲の意義を次のように言う。東西の宗教思想を一身のうちに取り入れた偉大な魂の姿はどのようなものかと気に掛けてきた世界の宗教学者や思想家たちが研究すべき一つの真珠のようである。そして、東洋思想の核心であるガンジーを生んだヒンズー教の不殺生、非暴力抵抗の思想、元暁を生んだ万法帰一の大乗仏教の思想、また純朴さを求め守ろうとする老荘の批判的な無為思想、儒家の仁義・天命の思想、および韓国のハヌルニム信仰などが、キリスト教思想および西洋の科学精神と渾然一体となって融合している、と評価する。このように咸錫憲は、基本的に東西洋の古今を行き来しながら、歴史を導き時代を動かした人物である。独裁政権にたいして、民衆を抑圧する暴力を断固として拒否し、「シアル」を強調して、生命とおのずから自然にたいする畏敬の念を反映させている。

咸錫憲は民族精神にあふれた思想家でありながら、独裁政権に抵抗する民主化運動の中心にいた。また、民衆を抑圧する軍事独裁は、人間が志向する平和の道に反するものなので、抵抗することが、平和を作っていくことだと主張した闘う平和運動家であった。1970年「シアルの声」創刊とともに、民衆運動を展開しながら、反独裁民主化運動の先頭に立った。とくに、1979年にアメリカのクエーカー奉仕会の推薦でノーベル平和賞の候補に上げられ、1985年にもふたたびノーベル平和賞候補に上がった、20世紀の韓国を代表する平和運動家である。したがって、咸錫憲の非暴力平和思想の研究は、韓国の典型的な民主化を経験し、生命・平和・霊性の土着的思想にあふれた平和思想家として、その意味を探ることができる。

II. 非暴力と平和の理解

非暴力 (Non-violence) は、動物を生け贄に捧げる祭祀の伝統に反対し、生命の犠牲のない解脱を追求したインドの宗教伝統から出てきた。非暴力の原義は不殺生 (ahimsa) である。ところで、ガンジーはソロー (Henry David Thoreau) の『市民的不服従』などに影響を受け、不当な権力にたいする不服従運動を展開して、「アヒムサー (Ahimsa)」を「非暴力」という意味に拡張した。ガンジーの非暴力は、深い道德意識と宗教的な儀式から出てくる精神力によって、相手を暴力的に敗北させる代わりに、精神力で相手の心を変化させることにある。また、みずから痛みや苦しみを受けることによって、相手の心の中にある愛と人間的感情を呼び起こさせるものである。咸錫憲は「非暴力主義は、互いに争うのではなく、問題があるときにも、自己犠牲によって互いに相手の中に隠れている良い力を引き出すよ

うにしようという努力」と言う。

平和は、目的だけでなく、手段としての平和も重要である。平和は、いかなる場合にも平和的手段によって達成しなければならない。非暴力的手段は、単に暴力の排除のみを意味しない。非暴力は外在的な力ではなく、人間が内在する力によって発現される。ガンジーは、人間の悪意や憎悪のような内部の暴力から人間を自由にするのが、真の非暴力だと言う。また、非暴力的な生は個人的なものだけでなく、全体的な生と関連付けられ、真理に従う人生であり、他人にたいする愛と奉仕を通じて可能だと言う。ガンジーは、非暴力が暴力の悪循環を断つ最高の方法であると強調する。このように非暴力は生きものを殺さない不殺生という消極的意味だけでなく、生命にたいする愛という積極的な意味ももっている。非暴力的な手段は、確然と現れる社会的な暴力にたいする犠牲の甘受と市民的不服従によって応答しなければならない。

従来 of 平和研究では、平和の対立概念は戦争だった。しかし、インドのスガタ・ダスグプタ (Sugata Dasguta) が 1968 年に「非平和と悪開発」という論文で、戦争だけでなく、平和な世界を妨げる要素として、「飢餓、貧困、疾病、栄養不良、汚れ」などを特徴とする苦難と窮乏を挙げている。ダスグプタは平和でない理由を社会の葛藤と暴力構造の中から見出している。彼は目に見えない非平和的な暴力を孕んでいる構造的な問題を克服しなければならないと言う。

ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung) もこのような観点から暴力と平和を再定義し、構造的暴力理論まで発展させており、さらに「消極的平和」と「積極的平和」という平和概念を確立させた。消極的平和 (negative peace) とは戦争を含む直接ないし物理的な暴力のない状態のことで、国家安保的概念の平和を指す。一方、積極的平和 (positive peace) は直接的、構造的暴力、文化的暴力までもがない状態を意味するもので、人間の安保概念としての平和を意味する。ヨハン・ガルトゥングは平和を、戦争だけでなく、「あらゆる種類の暴力がない状態」¹、定義した。これは単に「戦争なし」が平和と直結されてきた過去の平和理解を破り、平和の問題を構造的な問題に拡大して見るといった新しい視点を切り開いたのである。

積極的平和は「直接的で積極的平和」「構造的で積極的平和」「文化的で積極的平和」に区別される。直接的で積極的平和は言語と行動が優しさと、自身に対する善と、自他の心と精神で構成される。これらは人間のあらゆる基本的欲求である生存と福祉と自由のアイデンティティに接近する。構造的で積極的平和は抑圧を自由へ、搾取を平等へと置き換え、そし

て強要の代わりに平和を、分離の代わりに統合を、分裂の代わりに結束を、疎外の代わりに参与を強調する。これは共同体的で間接的な平和とすることができる。文化的で積極的平和は暴力の合法化を平和の合法化へと変えることができ、宗教、法、思想、言語、芸術、科学、言論などが積極的な平和の文化をつくる。²

ヨハン・ガルトゥングは平和研究の課題は「なに」と「なぜ」が重要であるという。つまり、平和的行為の基本的問題は何が何故何処で誰によってまたは誰のために平和行動を求めるのかを明らかにすることにあるというのである。そのためには平和と暴力を表すことができる社会的現実の構造を見確かめるための見取り図が必要であり、このとき優先されるのが暴力の研究である。³暴力研究を通じて暴力の状態を診断することになり、暴力の過程と増減か同一の程度を予測できるようになり、それによって問題に対する処方を見出すことも可能になる。暴力研究を基にした処方は平和のための解決策または治癒の方法になる。⁴

平和構築 (peace building) は暴力を軽減させていく過程である。人間は生の質を向上させたり、最小限の苦痛を減らすためには平和のための過程が必要である。ゆえに社会の構造的暴力を排除し平和を成すためには絶えず抵抗するしかない。しかし抵抗は人間によるものではなく、宗教が求める真理の根源へ帰り、非暴力的手段を通じて成されなければならない。暴力を正当化するのは人間の意思であり、自己中心的平和と欲望のために暴力を必要するに過ぎない。

Ⅲ. 考えて行動するシアル (씨알、種粒、民)

シアル (씨알、種粒、民) という語は柳永模 (ユ・ヨンモ、咸錫憲の師) から使い始められた。彼が『大学』の「大學之道 在明明徳 在親民 在止於至善」を「一つの学問の道は、明るい内面 (中身、性品、徳) を明らかにするところに在り、シアル (種粒、씨알、民) に会いに行く (親しみと愛・情を以て父に会いに行くが如く) ところに在れば、善きに止 (とど) まるに在る。(한 배움 길은 밝은 속알 밝힘에 있으며 씨알 어둠에 있으면된 데 머뭇에 있나니)」と解し、民をシアル (씨알、種粒) と称したことから「シアル」という言葉が誕生することになった。⁵

民衆、百姓、国民のような言葉が既に存在しているにも敢えてシアルという言葉を使うのには二つの理由がある。第一に、民という言葉のなかにすでに支配・被支配の関係が設定さ

れているということである。これは封建制度の名残である。民が封建時代を表す言葉であるならば、シアルは民主主義時代を表しているといえる。第二に、我々民族の主体性と民族魂を取り戻すためである。中国の事大主義漢字文化によって失われてしまった民族精神と言語を取り戻すためにも、純粋な韓国言葉であるシアルを使おうというのである。⁶咸錫憲にとってシアルは、あらゆる生の根源でありながら、ほぼ失われてしまった民の本来の姿を取り戻すための一つの形象であり運動であった。

咸錫憲はシアル（種粒）の持つ意味を深く顧み、シアルを平和の集約体であり、平和をつくる一つの要素であると考えた。

シアルは平和であり、平和はシアルにある。シアルはいうなれば、内在の平和、極小世界の平和である。本質的な平和だ。シアルの基となるのが平和であり、平和の実がシアルである。ゆえに、シアルの目的は平和な世界以外ありえない。極小は極大に通じる。ゆえに、登山人は登山の途中にその目を山の頂上から背かないことこそが、全ての足乗りを正しく行うことができるように、シアルが自ら磨き鍛えようとする途中にも、世界平和の理想を忘れてはならない。⁷

シアル（種粒）が自己に基づき自分の声を発するということが平和運動の始まりであり、平和運動の中心である。咸錫憲が70という歳で『シアルの声（シアレソリ、씨알의 소리、民の声）』を著したのも、平和の訴えを叫ぶのも、シアルの本性が平和であり、それを表すことが平和の完成であるからである。

咸錫憲はシアルを不滅体であると捉えていた。シアルが自ら自己の生命が不滅体であることを認識できれば、非暴力平和主義の精神を悟らせることができると考えていた。⁸シアルが自己の内にあるという平和的靈性に悟ったとき、はじめて平和実現の礎を据えるのであり、運動の強力な原動力として作用しはじめるのである。シアルの平和主義は生命に対する理解からはじまった。シアルの生命根本原理は「自らする（스스로 하다）」ことにある。「自らする」ことにおいて、いかなる抑圧や暴力的方法は源泉的に拒まれる。「自らする」ことは暴力の拒否であり、暴力に対する抵抗である。暴力こそ「自らする」ことを妨げる要素である。自と他の「自らする」を守るために、いかなる暴力と強制性を拒まなければならない。「自らする」は不正な権力に抵抗し、それでいて同時に敵対的な権力者たちに対する暴力を拒み、相手の理性と良心に訴える非暴力抵抗の平和主義である。⁹

咸錫憲は平和運動はすなわち精神運動であるため、可能・不可能を計算せず、成功・失敗を勘定に入れない人間の本心を変革させようというのである。1946年11月から発効され

たユネスコ憲章でも「戦争は人間の心から生じるので、平和を守るのも人間の心からはじまらなければならない」と宣言し国際平和と人類の共同繁栄を目標とした。また、これまで展開されてきた平和研究の捉え方の一つは人間的・個人的捉え方であり、戦争の原因を人間性に内在するものと見做し、人間の攻撃性・戦争本能を純化させることで、内面的な心の平和は国家間の戦争を防ぐにも寄与され得ると見做した。¹⁰ 咸錫憲もまた、非暴力平和は宗教が持つ霊性運動を通じて人間の「新しさ」を以て可能であるとみている。咸錫憲は一生を宗教体験を通じた宗教霊性と宗教哲学的記載を見せることによって新宗教運動を通じた人間の精神改革を強調した。これは民衆のことを表現した「シアル（種粒）」が即ち、自己革命で生命に対する「新しさ」を認識していく過程を通じて「考え行動するシアル（種粒、民）」にならなければならないということである。

IV. 非暴力：目的と手段の一致

咸錫憲の非暴力はガンディーから影響を受けている。ガンディーの非暴力は相手側に対する敵対感の克服と、暴力に対する放棄ではなく暴力からの自由である。非暴力は現実の生に真理を実現させることである。咸錫憲の非暴力は平和実現のための生(畝)の方向であり、精神革命であり、自己犠牲精神を伴うのである。

咸錫憲は 1965 年に著した「非暴力革命」という文章を通じて、非暴力こそが我々が進むべき方向であることを提示した。

我々が進むべき道はただ一筋しかございません。非暴力革命の道であります。それは真であります。誰もが、またどんなことにおいても守らなければならない真理であります。永遠な真理がこの時代が進むべき道として我々の前にあらわれたのが即ちこの非暴力の道であります。今日までこの歴史を導いてきたのは暴力主義でした。その結果世界は今日に見えるようにこんなにも乱雑し惨憺な状態となってしまうています。もう、これ以上進むことのできない行き止まりになってしまっております。それは当然のことです。それは真ではなく偽であるからです。ゆえに、これから我々は我々の考えと行動と生活(サリム、生、살림)を根本的・全体的に改めなければならない時点に至りました。

なので、これは革命の道なのであります。¹¹

真の革命は非暴力の道であり、それが真理へと向かう道であると捉えた。暴力主義という偽に対抗する対案として非暴力主義を堅持した。

平和を志向するのであれば実践のための手段も平和的でなければならない。古代ローマの戦略家ウェゲティウス（Flavius Vegetius Renatus）のいう「汝、平和を欲するなら、戦い（戦争）に備えよ」といった格言に反対し、近代平和学ではヨハン・ガルトウングの『平和的手段による平和』という書籍の題名のように「汝、平和を欲するなら平和を備えよ」¹²に替えている。咸錫憲もまた、非暴力の原理の核心は手段と目的の一致であると言い、非暴力の目的は手段の道を進むことであることであると表現している。

目的は善でありながら、手段が悪であるのが革命である。そして手段が悪であるとき、目的である善は残されない。目的は最後にあるのではなく、全課程の一刻一刻に含まれている。手段が即ち目的なのである。道は即ち終点である。道を進むことが即ち目的である。ゆえに、「道」というのである。「道を進む」ことを正しくすることが、まさにその目的であるために、道徳と言うのである。目的は手段を神聖化する。目的のためには手段を選ばない・結果良ければ全てよしといったことがあらゆる革命家が叫ぶフレーズになっているが、しかし皆そこに陥ってしまっているのである。¹³

ここでの革命は暴力を意味している。そういう意味で、暴力を手段とする革命は全て失敗であったと言うのである。非暴力平和運動は手段と目的の一致を言う。そしてそれは人間がまさに到達すべき「道を進む」ことであり、すなわち道である。

しかし、咸錫憲の非暴力主義は当時の闘争において主流だった人たちに認められなかった。過激な闘争で民主主義と平和を樹立しようとしている人々にとって、咸錫憲の叫びは宗教的妄想に他ならなかった。非暴力という語は暴力の意味を制限的に解釈する場でのみ有意味であった。武力に武力を以て対応しないことで、武力の非人間性を暴露する意味としては大きいのであるが、社会と国家の構成自体が暴力的である認識が拡張されつつある今日においては、制限的な効果のみをもたらす。

また、個人、集団、国家が平和を求める意図と目的が同じでないことが多い。仮に強者は現体制及び秩序の安静を通じて平和を求める一方、弱者は強者によってつくられた不平等の解消から平和を感じる。ゆえに強者は構造的または体系的暴力を不可避ないし必然的なことであると正当化させようとし、弱者は不平等の解消のための構造的暴力に対抗する過程を経る。

ゆえに、手段と目的の一致による「道を進む」は他人の犠牲ではなく自己犠牲を必要とする。咸錫憲は、自己犠牲を覚悟してでも、相手が同意するまで覚醒を促す言葉をし続けなければならない、自己犠牲は精神的に暴力に勝てるという信念として作用されなければならない

い¹⁴という。

V. 多元主義的平和共同体

咸錫憲は平和の概念を東洋的な思考の枠で理解している。

平和とは漢文で「平和」と書く。平という字は解すると、私事的ではなく公共なものであるという意味から、気運が地から登り広まっていく姿をあらわしたものであり(中略)和という字は本来一方が音を奏でると、他方でもそれに合わせ音を奏でるという音楽から、多数の音をうまく調和されるよう奏でるという意味である。(中略)一人の人が歌を歌えば、それを聞いてこちらからも応じて歌うことを和答という。このような平と和をくっつけて考えると、これは人と人の間(関係)、家と家、団体と団体の間、ひいては国と国、天と地の間を平たくするのが平和である。¹⁵

「平」とは単に機械的・物理的な停止状態というよりは、一か所に籠った気運を解いて自由に放出させる状態を意味し、ほどよく散らせ、多・少の偏りがなく万遍にいきわたらせ、均にするという意味である。「和」とは音楽において様々な音が調和をなし美しい音楽を作り出すという意味から、調和をなし均にするという意味である。咸錫憲のいう平和は人間の生のあらゆる領域においてくまなく均等に行きわたらせ、互いに調和と統一を成し、人間の生の気運を開け放すようにすることだという。咸錫憲の平和はそれ自体で存在する静的な状態ではなく、差別と暴力を除去していくと言った動的な過程として存在する。これは非暴力平和運動が一時的なフレーズに止まるのではなく、各々の生のなかで受容されるべき実践課題としてあり続けながら、それは一つの生命運動なのである。

「平和」は「関係と関係が疎通し合い調和を成す状態」を指す幅広い概念として使われている。人と人、家と家、団体と団体、国家と国家、天と地の間(関係)までも平たくする(均する)のが平和である。これはシアル(種粒)が個人、社会、国家、そして宇宙までの生命と調和していかなければならない共同体であることを意味している。共同体は「同を共にする団体」と定義している。「同」を重視するというよりは、「共有」を重視しながら、他者に対する包容性を育てて行かなければならない。そして、シアルは何を共有するかに対して深く考えなければならぬ。咸錫憲における平和共同体はシアルの精神運動を基盤に、同一性ないし統一感の共同体ではなく、多様性を受容し調和し抱擁する共同体である。

咸錫憲は多様性を含む調和した平和共同体について次のように表現している。

私は統一された、一つの色彩、一種の花だけで満開している春なんて想像できません。赤いバラはとても美しいですが、天下が専ら赤一色でしたらその景色はどこか失われている姿なのです。白いユリの香りがどんなに良い香りでも、この地球の花が専ら白いユリだけになってしまえば、百の花の千の色彩と香りを失ってしまい、淋しくなるでしょう。¹⁶

種類と形、大きさと色などが異なる多様な花は、自身の特性に沿って力を発揮し色彩と香りを放つ共同体の事を意味している。これは諸生命との調和のなかで生きていく「平和多元主義 (pluralism of peace)」¹⁷的な共同体を意味する。多元主義は、多様であるという事実を認め、多様性同士の事実を肯定する態度である。咸錫憲は、和は即ち調和と均さであり、均さ無くして世界平和の道は進めない¹⁸ という。和は自己と異なる価値を尊重し共存していく姿である。平和共同体をつくっていくためには、違いを排除する自己中心的平和を警戒し、多元主義的姿勢を以て人類全体のための平和を目指さなければならない。これからの社会は理念、民族、地域、男女、階層間の自己アイデンティティを超え、生命同士の調和を認めていく平和共同体の形でなければならない。

VI. さいごに：非暴力的生（日常生活、畚）

咸錫憲は1988年ソウルオリンピック開会式で、「平和で新しい世界への招待」¹⁹を発表しながら、平和理論と平和運動を世界史に告げた。この時期にソウル平和オリンピック院長の座を受諾し、平和大会に参席した咸錫憲の行為は彼と親友だった安炳茂(アン・ビョンム)教授からも偽の平和主義者盧泰愚(ノ・テウ)政権に利用される行動であったと批判された。しかし、咸錫憲にとって平和において、盧泰愚政権より大きな価値は韓民族であったし、韓民族より重要な価値は世界平和であった。咸錫憲は平和が人類が最終的に実現させるべき課題であることを強調した。

非暴力的な生（畚）は真理に沿う生（畚）であり、他人に対する愛と奉仕を以て可能となる。ガンディーの非暴力は政策や方法として一時的に適用される行動様式ではなく、全世界を変革させ成長させる生命の源泉²⁰であるという。超越的な世界に存在する信仰の対象でも抽象的な哲学の対象でもなく、日常のなかから活発に動き出す偉大な力なのである。非暴力は自己の生を通じて現れるものであるため、社会を離れてなされることは不可能である。個々人の市民が自己中心的な位置付けから離れ、調和した共同体意識をつくっていかなく

ればならない。このような可能性は韓国社会のろうそく集会在非暴力平和運動の形を以て見せてくれた。しかしこれを各々の生(日常生活、삶)のなかでどれほど受容していけるかの問題が咸錫憲のいう「考えて行動するシアル(種粒)」の生なのである。宗教靈性を通じた個人の革命が、潜在されたシアルの精神を目覚めさせ得るのである。ゆえに、咸錫憲は平和運動は全体意識に基礎を置いた精神運動に基づかなければならないという。

暴力に対し非暴力を以て応じるのは自己犠牲なしには不可能である。咸錫憲の非暴力抵抗は精神革命が武力革命より優先されるということを物語っている。シアル(種粒)として代弁される民衆が平和をつくっていく核心的役割を遂げれば遂げるほど脱人間化していく現代社会において、人間尊重の覚醒が必要である。また、咸錫憲はあらゆる生命の多様性を受容し、調和的に抱擁していく平和多元主義的共同体を理想的な世界としてみている。もはや21世紀平和共同体問題は、性的少数者、移住労働者、障害者、社会的弱者、そして最近の難民問題まで拡大していかなければならない。咸錫憲の表現のように、多様な花の香りが満開した平和共同体の姿が必要なのである。

注

- 1 ヨハン・ガルトゥング, 강종일 외 공역, 『平和的手段による平和』, 들녘, 2000. 8 쪽.
- 2 김·미ョン히 「宗教、暴力、平和: 요한가르트룽의 평화理論を中心に」, 『宗敎研究』 제 56 집, 2009. 140-141 쪽.
- 3 요한·가르트룽は直接的、構造的、文化的暴力理論を提示している。第一に、直接的暴力は暴力の結果を意図した行為者または加害者が存在する暴力のことを指す。第二に、構造的暴力は人々の間で社会と国家間に、また人間内面の性格構造から生じる間接的で精神的な、または意図されていない暴力を意味する。第三に、文化的暴力は宗教と思想、言語と芸術、科学と法、マスメディアと教育の内部に存在し、直接的・構造的暴力を正当化する機能を遂行する (요한·가르트룽, 강종일 외 공역, 『平和的手段による平和』, 들녘, 2000. 18 쪽-20 쪽 참조).
- 4 요한·가르트룽, 강종일 외 공역, 『平和的手段による平和』, 들녘, 2000. 81 쪽 이하 참조.
- 5 咸錫憲 「シアル(씨ㅇ·ㄷ, 種粒)」, 『考える民であってこそ生きていける』(全集 14), 한길사, 323-324p.
- 6 박·지스순 「シアル思想と民衆神学」, 『씨ㅇ·ㄷ의 소리』 제 96 호, 1988. 62 쪽.
- 7 咸錫憲 「世界平和への道」, 『6 천만 민족 앞에 부르짖는 말씀』(전집 12), 한길사, 281-282 쪽.
- 8 咸錫憲 「シアルの声、シアルの思想(씨ㅇ·ㄷ의 소리, 씨ㅇ·ㄷ의 사상)」, 『考える百姓でこそ生きていける(생각하는 백성이라야 산다)』(전집 14), 한길사, 383 쪽.
- 9 박·지스순 「シアルの生命思想」, 『シアル生命平和』, 한길사, 2007. 144 쪽.
- 10 첸·산욘은西洋中心になり展開されてきた平和研究は3つのレベルでの接近方法に分類されるという。第一は、内面的心の平和を通じた人間的接近方法であり、第二

は、政治改革と民主化を通じた国家レベルでの接近方法である。第三は、連盟や世界政府を設立することで平和に貢献する国家間の交渉や機構を通じた国際的レベルでの接近方法である(チェ・サンヨン「近代西洋の平和思想」『21世紀平和学』 풀빛, 2002.

13 쪽)。

- 11 咸錫憲「非暴力革命」, 『人間革命の哲学』 (전집 2), 한길사, 1983. 34 쪽.
- 12 이·돈기『20世紀平和テキスト 15選』, 아카넷, 2013. 19 쪽.
- 13 『咸錫憲著作集』 (2 권), 한길사, 2009. 170 쪽.
- 14 咸錫憲「人間を問う」, 『死ぬまでこの一歩で』 (전집 4), 한길사, 341 쪽.
- 15 「韓民族と平和」, 『咸錫憲著作集』 (2 권), 한길사, 2009. 245 쪽.
- 16 咸錫憲「平和な新世界への招待」, 『人間開発』 통권 58, 한국인간개발연구원, 1988.
- 17 이·チャンスは平和多元主義を平和の概念、理由、理解が多様であるという事実を認めるものの、多様性の中に調和の可能性を認める態度であるという(이·チャンス『平和と多様な平和 平和多元主義と平和人文学』, 모시는사람들, 2016. 18 쪽)。
- 18 咸錫憲「世界平和の道」, 『シアルの声』 2 호, 1972.
- 19 咸錫憲はオリンピック開会式において、個々人の全体意識、新しい精神運動、平和の世界史的ビジョン提示といった 3つの平和思想と平和運動を提示した。
- 20 안·신「ガンディーの多文化宗教観に関する研究」, 『宗教研究』 제 57 집, 2010. 124 쪽.